

平成27年4月バス例会 奥出雲の歴史とロマンを訪ねて

講師 田口義之会長
平成27年4月19日実施



備陽史探訪の会

スケジュール

- ◎7時45分 福山駅北口発
 - ↓ (山陽自動車道経由尾道松江道路)
- 10時15分 田部家土蔵群 (稲わら工房・トイレ休憩)
 - ↓
- 10時45分 菅谷高殿 (国重要有形文化財菅谷高殿など)
 - ↓
- ◎12時 三沢城跡 (昼食・城址見学・トイレあり)
- 14時 同上 発
 - ↓
- 14時30分 たたら角炉伝承館 (大正・昭和の砂鉄製鉄炉)
 - ↓ (尾道松江道・山陽自動車道経由)
- ◎17時30分 福山駅北口着解散

- (1) 団体で行動しますので、単独での行動はおつつしみください
- (2) スタッフの指示に従ってください
- (3) ごみは各自でお持ち帰りください
- (4) 体調を崩された方はスタッフにお申し出ください

たたら吹き

たたら吹き（たたらぶき）とは、日本に古くからある鉄を得る手法である。これは砂鉄から和鋼を製造する日本独自の製鋼法である。単に「タタラ」と書かれる場合や、「鑪吹き」、「踏鞴吹き」、「鉦吹き」とも表記して、英語では「Tatara steel making method」と呼ばれる。別名、「玉鋼製造」や「ケラ押し法」と呼ばれることもある。

類似用語にたたら製鉄があるが、これは和鉄・和銑を製造する方法で間接製鋼法の一つである。たたら（鑪）とは鞴を意味しており、たたら吹きと類似の送風装置及び築炉で行うためこの名称が共通しているが、製鋼法としては別物である。また、現在イベント等以外でたたら製鉄を操業している場所はない。

「たたら」は「高殿」と表記されることもあるが、この場合にはたたら吹きを行うための炉のある建物を指す（「たかどの」ともいう）。

製鉄工程

粘土製の炉の中に木炭を入れ、点火後は鞴（ふいご）で風を炉内に送りながら木炭と砂鉄を交互に上から加え続け、炉内の燃焼反応による高温と炭素の還元力により砂鉄から酸素を奪う事で鋼が作られる。

作業は焰の加減を見ながら村下（むらげ、たたら製鉄の作業長）の指示により木炭と砂鉄を交互に炉にくべてゆく事が殆どである。この際、風量が多いと炉の温度が高くなり、少ないと温度が低くなって失敗となる為、村下は鞴を踏む人にも慎重に指示する。

炉に点火後、およそ一日が経過して焰の色が山吹色になれば中間結果と



して成功である。この後も鞆の風量を加減しながら木炭と砂鉄を炉にくべてゆく。時々炉底に穴を開け、そこから溶解した不純物（ノロ）を排出する。ケラはノロの中で育つため、排出する量は多すぎても少なすぎてもいけないとされる。

火は3日3晩程で下火となり、高温で焼かれた炉は再使用されること無く壊され、炉内の灰にまぎれた金属塊である「ケラ」が得られる。ケラは打ち砕かれて良質だが少量の「玉鋼」と多量の銑鉄である「ずく」が最終的に得られる。

どのくらい製造できるか

平安時代以降の炉では、作成から破壊までの一回の作業は「二代」（ひとよ）と呼ばれ、この間に多量の木炭と砂鉄が投じられる。以下に収量の例を示すが、炉が大きく更に木炭と砂鉄を投入すれば収量も増すはずである。

原料

木炭…13トン

砂鉄…13トン

製品

ケラ…2.8トン

玉鋼…1トン以下・日本刀の刃金に使われた

ズク…2トン前後・「包丁鉄」とも呼ばれ、日本刀の心金、棟金、側金など主成分としての用途の他に生活用品の作成に使われた

衰退と復元

たたら吹きでは非常に優れた純度の鉄が得られるが、ケラの部位や作

業時期により品質が非常に異なり、炭素量・純度が安定した品質の鉄鋼が得にくく、それぞれの鉄鋼に合わせて浸炭・脱炭処理を行うなど製品の作り方を考えなければいけないという難点があった。

明治時代に入ってからには旧来の鋼間屋から玉鋼を仕入れるよりも安価に済んだこともあり、刃物鍛冶などの職人などは、良くできた玉鋼よりは劣るが安定した品質を持つイギリス、スウェーデン等からの輸入鋼材（洋鋼）に切り替える者が多かった。

第二次世界大戦後には、たたら吹きによる製鋼は、近代製鉄に価格面で圧倒的に不利であるため壊滅状態であった。しかし、近代製鉄により作られた鋼では、玉鋼と比して質が悪いが為に良質の日本刀を作ることが困難になっていた日本刀業界により、たたら吹きによる製鉄の復活が請願された。これに日立金属安来工場が応え、現在まで少量であるが製造が続けられている。工業的には完全に廃れていたが、生き残っていた村下を見付け出してたたら（鑪）吹きを復元する経緯は、NHKのドキュメンタリー番組プロジェクトXで挑戦者たちで紹介された。この復元により、従来の高温で不純物を燃やすような方式ではなく、低温で製鉄を行うことにより、鉄鉱石から鉄を抽出するような形で純度の高い鉄を得るというノウハウも得られた。高炉銑の精錬が未熟な明治・昭和中期までは、うまく作れば純度のよさから圧倒的な品質を示す事が多かった。この技術を基盤とした近代の特殊鋼技術は発展した。

田部家 (島根県飯石郡吉田村 (現・雲南市))

遠祖は紀州熊野庄 (現・和歌山県) 田辺族の別派であると記録されている。文治年中源頼朝が備前、備中、備後にそれぞれ地頭職を置いたときその中に備後の周藤通資という武士がいた。田部氏はその周藤家の家臣であったと記録されており、それから300年後、田部彦左衛門という人物が鉄山業を開いて定着したという。田部家はこの彦左衛門を初代としている。

江戸時代には準武士として待遇され政治的には郷村役人よりはるかに上位にあった。田部家の黄金時代には山林二万五千ヘクタールをもち田地が千ヘクタール、小作千戸、牛馬千頭、島根県飯石郡はその大部分が田部家の領地であるという名実ともに日本一の山林地主であった。

長右衛門(3代)は作家の司馬遼太郎との対談の中で「私のほうは源平時代には紀州の田辺にいて、田辺湛増の一族だったようですが、室町のころにこの出雲の吉田にうつってきたのです。私で3代になります」「出雲には私の家だけじゃなくこういいう仕事の家が10指を越すほどありました。それらは普通、タタラモン」とよばれていました。決して上品なもんじゃない」と述べている。



菅谷高殿とたたら製鉄

吉田町でたたら製鉄が始まったのは鎌倉時代であるといわれていますが、この時代から中世までは「野だたら」といわれる移動式の製鉄法が行われていました。近世に入り吉田町でも高殿を構えて操業が行われるようになると、町内のあちこちで盛んにたたら製鉄が行われ、企業だたらとして隆盛を極めるようになりました。全国で唯一、今に残る「菅谷高殿」は1751年から170年間の長きにわたって操業が続けられ、大正10年にその火が消えました。このことは、この地がたたら製鉄を行うのに最適であったことを意味しています。高殿式の製鉄が始まってから約300年、豊富な森林資源と、原料である砂鉄に恵まれた吉田町での製鉄の歴史の長さを思い高殿の中に足を踏み入れると、先人達が私達に遺してくれた歴史的、文化的遺産の偉大さを体感することができます。

山内(さんない)

たたら製鉄に従事していた人達の職場や、住んでいた地区を総称して「山内」と言います。たたら製鉄の技術者達の日常生活がここで営まれました。当時のたたら製鉄の技術者達はもう一人もいません。しかし製鉄で山内が盛えた頃を偲ぶことのできる町並みがここには残っています。家屋は改築を繰り返していますが、ここに住む人達の内側には昔からの伝統が受け継がれています。それと同時に吉田町はたたら製鉄を伝える建物を保存し、復元してきました。静かな山内の中をゆっくり歩いてみて下さい。いろいろなことが発見できるでしょう。元小屋





山内地区の仕事から生活習慣を含めて、事務所的役割をしていたのが元小屋です。天保末期の頃の建物ですが、改造、補修を繰り返して現代に残しました。名前には小屋という文字が付いていますが、造り、間取りは昔の農家と同じです。二階建て柿葺き（こけらぶき）木造のこの建物には四畳半から十畳の部屋がいくつかあり、風呂場、台所など当時の生活の現場が残っています。天保4年（1833）に焼けた記録がありますから、その直後に建てられたものと思われます。元小屋の中をそっと覗いてみて下さい。当時の生活の匂いを感じられます。

大銅場

ここでは鉾（けら）を割る作業が行われました。この建物の中には約200貫の大きな分銅が吊っており、これを落として鉾を粉砕しました。その分銅を持ち上げるのが水車です。

金屋子（かなやご）化粧の池

私達に鉄のつくり方を教えてくれたのは、「金屋子」という神様であったと伝えられています。吉田町の菅谷たたらに伝わる話では、金屋子神は地上に下りるとき、「村下」（むらげ）一人と「オナリ」一人をつれて下りたそうです。村下とはたたら製鉄の技師長、オナリとは巫女で村下の飯をたく女だったそうです。菅谷高殿のすぐ裏には「金屋子化粧の池」があります。女神の金屋子神はこの池を鏡にして化粧をされたそうです。

村下（むらげ）

村下とはたたら製鉄における技師長のことで、世襲で一子相伝でたたら火が消えるまで引き継がれてきました。村下の仕事ぶりは全て経験

と勘によって決まり、その科学観・自然観は優秀な銅を生む源でした。
村下坂

村下だけが通ることを許された村下の花道です。線業に入る日の朝は川の水でみそぎをして全身を清め、そして身にまとうもの全てを新しくした村下だけがこの坂道を通って高殿に入ることができました。

山内生活伝承館

山内を見下ろすところにあるのが山内生活伝承館です。山内に住む人たちが残してきた遺産を大切に引き継ぎ、公開している館です。館内では「出雲炭焼き日記」をビデオで上映しながら、当時の生活に使われていたいろいろな民具を展示しています。四季折々に伝わる山内独特の習慣や生活を通し、たたら製鉄を支えた人々の心の有り様を垣間見ることができるとでしょう。

鐵泉丸

たたら製鉄が隆盛だった頃、この山の中で生産した鉄を運ぶために「鐵泉丸」という千石舟を持っていました。松江、広島方面への出荷は、陸路を馬車か手車で庄原か三刀屋まで運んでから川船を使いました。大阪へ出荷する際には鉄道を利用しましたが、鉄道が開通するまでは松江から「鐵泉丸」を使い下関を経由して大阪をはじめ全国へ出荷しました。道路も整備してなく、経済的にも未発達だった何百年も昔に、この吉田町から大阪までを事業圏内としていたことは、現代この土地に住む私たちが奮い起してくれます。(鉄の歴史歴史村ホームページより)



三沢城跡

信濃源氏の後裔で、信濃国飯島郷地頭の一族が、承久3年(1221年)の承久の乱で戦功をあげ、出雲国三沢庄を与えられ三沢氏を称した。三沢為長(為仲)は、因幡国鹿野を経て往来し、この地で良質な砂鉄を採取して野タタラ製鉄、山野開拓により力をつけ、嘉元3年(1305年)、仁多郡内をはじめ島根半島までも一望できる要衝の地・鴨倉山に当城、要害山三沢城を築城したのがはじまりである。

築城と同時に、為長は信濃から当地に移り、以後、姓も三沢と改める。延元3年(1338年)、大原香折新宮(加茂町屋裏)の地頭職となり、出雲平野部進出の足がかりを得た。

永正6年(1509年)、三沢為忠の代に、横田の高鏑山に藤ヶ瀬城を築城しここに移ったが、三沢城には城番を置いていたものと見られる。

天文9年(1540年)、この頃、三沢為幸は尼子氏に従って吉田郡山城の毛利氏を攻める(吉田郡山城の戦い)。毛利元就に敗れた尼子勢が敗走する中、三沢十勇士を引き連れて、毛利本陣を襲い、ここで討死する。

永禄元年(1558年)、三沢為清は、尼子晴久に従い、再度、毛利攻めに陣出、この時、三沢城留守居役・布広氏は、郎党を引き連れて、毛利本体に合流せんとする高野山城勢を阿井福原で破った。

永禄3年(1560年)、三沢氏は毛利氏に降礼をとり、後は毛利氏に従って尼子氏の高尾城・馬木矢筈城攻め、永禄9年(1566年)に尼子氏の本城・月山富田城攻め(尼子氏、毛利氏に降る)、天正6年(1578年)には織田信長の庇護を受けて再興を目論む尼子勝久・山中幸盛の上月城を攻め

(上月城の戦い)、続いて天正9年(1581年)同じく羽柴秀吉により水攻めを受ける備中高松城救援などに従った(備中高松城の戦い)。しかし、天正11年(1583年)、三沢氏の威勢を恐れた毛利氏の甘言により、三沢為虎は、一族郎党と共に安芸に出頭し、厳しい監視下に置かれ、三沢に帰城することも許されなまま、長門国厚狭郡に一万石を与えられ、毛利氏家臣となった。この後の三沢城の委細については不明である。



三沢氏の盛衰

三沢氏の出自

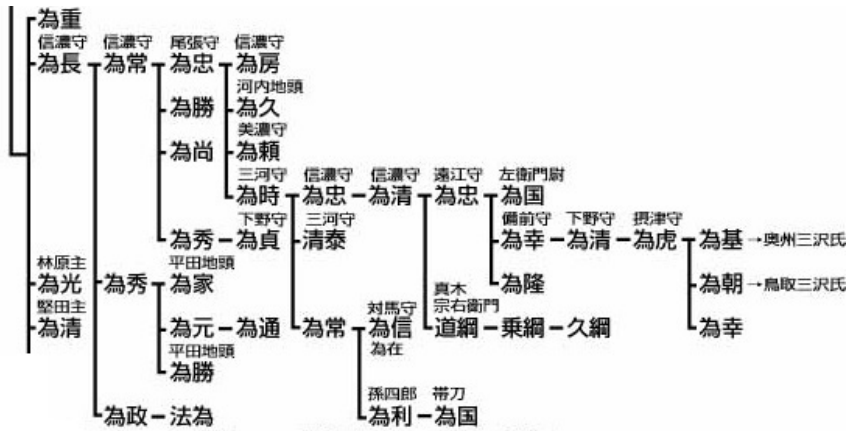
出雲国の国人領主三沢氏の出自は、清和源氏木曾義仲を祖とする木曾系、同じく清和源氏満快流の飯島系と言われている。木曾系の説は木曾義仲の孫木曾為仲を三沢氏の祖としている。それに対して、長府藩に仕えた三沢家に伝わる史料では、同じ源氏でも、源満快の流れを汲んだ信濃国伊那郡飯島を本領とした飯島為国を祖としている。

三沢氏の出雲入部

承久3年(1221)の承久の乱で戦功を挙げた三沢為光は、出雲国三沢荘(一般的には三沢はみさわと称されるが、三沢氏発祥の地である三沢荘はみざわと発音し、三沢氏の正式な発音はみざわである)を与えられた。その後の1302年に三沢為長(為仲)が、因幡国鹿野を経て往来し、この地で良質な砂鉄を採取して野踏鑛製鉄、山野開拓により力を付け、嘉元3年(1305年)、仁多郡内をはじめ島根半島までも一望できる要衝の地・鴨倉山に当城、要害山三沢城を築城し、同時に信濃から当地に移り、以後、名字も三沢と改めた。これが出雲三沢氏の始まりである。また、木曾系を出自とすると、三沢為仲が三沢に入って三沢氏を称したのが始まりとされる。

室町戦国時代の三沢氏

室町時代には出雲国を支配していた山名氏の傘下に入り、1391年には出雲守護山名満幸に従って明徳の乱に出陣。当主の三沢為忠は討死している。室町時代末期には、新守護の京極氏に従い、出雲国の有力国人



跡を継いだ三沢為清は大内氏に従属したが、月山富田城の戦いで吉川氏らと共に尼子氏に寝返り、大内軍敗退の一因を作った。しかし三沢氏の独立性は高く、尼子氏の軍役を拒否して尼子氏との戦いに及んだ場合もあった。こういった反抗的な態度を取ってきた三沢氏に対して尼子晴久は横田荘の三沢氏領地や砂鉄産地・たたら製鉄場を取り上げ直轄化

として成長を遂げている。

戦国時代になると守護京極氏の所領を奪った尼子氏とは対立関係となり、尼子経久追放の中心として活躍した。しかし1488年に三沢為国は尼子経久と戦って敗れ、その傘下に入った。しかし、経久三男の興久の率いる反尼子同盟に加わり、興久の反乱に加担したため、1531年に尼子経久に藤ヶ瀬城が再度攻撃を受け、三沢為国らは捕虜となる事態も起きた。これは当主の三沢為幸の手引きによる行動で、独立した動きを取る兄と弟を封じ込める策であった。三沢為幸はその後にも尼子氏に従い、1540年の吉田郡山城の戦いに出陣し、青山土取場の戦いで討死を遂げている。

するなど、経久に比べて強硬的な姿勢で三沢氏と統治している。

しかし、晴久の急死後から既に三沢氏も不穏な動きを見せていたこともあり、義久は父が取り上げた横田荘を返還した上で自らの妹を輿入れする等して懐柔しようとした。

三沢氏の出雲退去

1527年、大内領で



大手門跡の石垣

あった周防国・長門国を完全に制圧した毛利元就が出雲への本格的な侵攻を開始すると、赤穴氏、三刀屋氏とともに三沢氏も毛利氏に降伏した。その後の出雲侵攻には毛利軍の主力として活動した。尼子氏の滅亡後に、山中幸盛や尼子勝久が尼子再興軍として出雲への侵攻を図り、旧尼子家臣団にも動搖が走り、再興軍に加わる国人や豪族が続出した。その中で三沢為清は一貫して毛利氏に従い、尼子再興軍の撃退に活躍した。

為清死後の1588年、息子の三沢為虎は毛利輝元に謀られ、幽閉の身となった。その後解放されて長門国厚狭郡古帳に1000石を領する身

となった。この幽閉劇は、毛利氏による旧尼子家臣団への締め付けと出雲国の支配強化が狙いであり、三沢氏同様、旧尼子家臣団でもあった三刀屋久扶も追放の憂き目にあっている。三沢為虎はその能力を買われており、追放されなかつただけ三刀屋氏よりはましであったかもしれない。為虎は翌年の豊臣秀吉の小田原征伐にも参加し、文禄・慶長の役でも毛利軍の一員として活躍した。

その後の三沢氏

1600年の関ヶ原の戦いでは赤間関を守備。敗戦の後、三沢為虎は長府藩の家老職となり、三沢氏は江戸時代を長府藩士として続いた。

陸奥三沢氏

三沢為虎の息子・三沢為基が長府藩を出奔して、仙台藩伊達家に仕えた。為基の息子三沢清長は娘・初子が藩主伊達綱宗の側室（伊達綱村生母・綱宗には正室はいなかった）となった事から重臣の待遇を受けた。伊達綱村、伊達村和、伊達宗賛は、伊達綱村と三沢初子との間にできた子である。

三沢氏の血は亀田藩岩城家、宇和島藩伊達家にも流れており、出雲三沢氏の母系の子孫は奥州でも繁栄した。

因幡三沢氏

三沢為虎の息子の三沢為朝が鳥取藩池田家に仕えて因幡三沢氏の祖となった。

信濃東四
三澤信濃守
守跡ノ事

一一八 山名政豐判物
備後國信敷東西之内増分三澤信濃守跡事、爲給分所死行之也、任先例可全
知行之狀如件、
文明七年六月廿五日
(花押)

一七四 山名俊豐書狀(留書)

○以下二通ハ延應二年若クハ同應元年ノモノナルベシ、

去十四日注進、委細披見候了、殊条、懇切ニ承候令祝着候、
毛利クへ遺書狀候、先知行分事、於備州抽忠節候者、則可成判形候、但、
江田安藝、三吉上野ト三右衛門尉爲使差下候、依其返事、一段可定覺悟
候、それまでハ可被相待候、

一三澤クへ以案文如承候、書狀を下候、此事も於備州抽忠節候者、則可
相計候、其分可有存知候、

一和智、江田申談、細川京兆任口入、但州之儀屬無爲候者、可然由致注進候
之趣、近日兩奉行注進候、可有如何候哉、廣澤衆必定成敵候者、不日可有
注進候、然者、毛利其外身方面ク方へ判形等可成候、未落居之間者、先可
被相待事可然候、

一細川京兆、大内書狀事、得其意候、相調候て可下遣候、

一二郎四郎在京、一段忠節無比類候、并相陳衆等事、必可令褒美候、自其
方も能、可被申候、

一去五日、滑良兵庫助爲使下候、國之時宜可然之様可被申談候、

一同名多賀村上新藏人下見已下下書狀候、早被付候て、可有調法候、

一被申在所之事、國之時宜於顯形者、可相計候、委細兩人可申候、恐、謹言、

十二月廿七日

山内大和守殿

俊豐(花押)

當家繼嗣案

三二一 多賀山通續同家系圖案

當家繼嗣之事、
花栗弥兵衛逆心之時、取失之間、祖父以來之事、聞及シ通書置候事、

上祖父駿河守

通失下之年法名普天

祖父新舊名又西是

通時 法名永覺

祖母者三澤腹、遠州兄弟、

通廣 法名弁源

伯耆守

通廣 法名慶屋賀公

祖母者泉腹

法名月庭

新兵衛尉

通續 法名祥山淨賢

九歲之時、叔父花栗發逆心、通廣并兄又四郎、九月九日討果、其時御乳芝負
落當城懸合、多賀殿女房衆依爲姨母頼行、然處、明正月廿日、井上八郎右
衛門尉於檜木谷差逃候、於家者爲大切者、通續者七番目之末孫也、八歲而
後母、九歲而離父、從十歲爲家督、年号者永正十二年、至今年四十四年也、
通續廿口之時、依但州御下知、雲州ト引分、然者、兩年相勤、惣地下打荒、
三年目之年号享祿元年九月九日、尼子取詰當城、翌年七月十九日、廿日、
惣固屋之者共盡糺、或者加味方陣、或者敵陣ト落、悉被討畢、相殘者江木源
二郎、同善左衛門尉、白根若狹、同雅樂助、同豐後、同九郎左衛門尉、水間伊
賀、大嶋河内、湯淺肥前、田邊四郎左衛門尉、田邊五郎兵衛、彼等計相殘、三
日支、於引口抽粉骨者也、依、天道之御助、俄大風雨降下、切拔者也、於路
次討死之者、江木善左衛門尉、白根雅樂助、白根豐後、水間伊賀、田邊四郎
左衛門尉取向、無比類勤仕討死、何カ爲大切之者、於子孫能、可被懸目者
也、爲末代書置者也、

昔永祿二年癸巳十二月書之、在御判、



輝元隆盛
實子久隆
三吉久代
三澤久路
三人氏
出

二八七 毛利輝元書狀

右馬頭

隆通 御宿所

輝元

懇令申候、去年諸國之衆人質實子可被差出之旨申談之候、其節御方之御事者、州御出張之故、右之趣不申入候、如御存知爲始三吉久代、三澤方、其外各被指出之候、然時者、爲自余候間、被遂御分別、早々被差出候者可爲本望候、委細之趣、從元孝、隆家可被申入候、猶桂善左衛門尉可申達候、恐々謹言、

(天正十二年) 三月十三日

輝元(花押)

以上、大日本臣文書家わけ「山内首藤家文書」より

キ、そこハ又我々召仕候者おもての所帶を拘候事多々候之条、不及申候、

一是ハ近比不入申事にて候へ共、御方さぬかとハ、去ろしめ候まゝ候、候、聞て御置候へ、後々入事もあるる候之間、申よて候、雲州之三澤ハ、少分限よて候つと共、よこ田三千貫を親遠江守隱居分ニ取候つる、山内大和守者、高七百貫、長江三百貫、四ヶ村千貫、其外貳千貫程之隱居分よて候つる、さ候而、直通何と難儀之弓矢よも、其身心むき候ハ、ぬ時者、具足を一兩も不出候、河手衆罷出候事ハ、十度一度も候ハ、す候つる、又唯今三吉致高者、入君七百貫、布野七百貫、廻神三百貫、千七百貫知行之由候、此外よも候歟、不存候、此等之案者、知行者候而も、一圓具足を引、弓矢之用よハ、不能立候、我等事ハ、身を申候へハ、おろく候へ共、涯分弓矢之用、自身も内之者も立候と存候く、

一去春須ヶ川へも、小早川人數之事ハ、不存候、其外よハ、國衆と候ても、

以上 同 「毛利家文書」より

為國 帶刀魚

十九代 為清 三澤信濃寺 法名覺忠

文明七し未十月晦日 於江州弓削討死

小法師丸 八歳而死去

為忠 三澤左京亮 遠江守 法名覺榮居士

為宗 四郎右衛門

為孝 小四郎

為毗 弥四郎

正俊

大寺寺

還俗而号九郎四郎為親

為助

新四郎

為

源三

為永

慶四郎 法名覺勝

忠文

与四郎 三刀屋地頭

城下討死

為廣

上總介

為盛

高田寺中納言

還俗而号諸左衛門尉

為隆

太郎左衛門尉

法名覺繁

為久

三郎兵衛尉

三代

為清

三澤左京亮

自廣忠以來代々在城于出雲國仁田郡雨河村三澤庄龜嶽山故娶同國之主尼子義之女成賀

永錄十二年十二月六日自毛利家於伯州日野郡之内六百貫之地賜之

為虎

三澤少輔入部 攝津守 讚岐守
從五位下

母尼子義之女
出雲國中二郡隱岐半
國伯耆二郡都合古帳
十二万石領之且於近

江國坂田大上兩郡之
内二万石從公方家
足利重而拜領之
輝元公廣嶋御筑城之
節蒙繩張之命其砌於
長州厚狹郡賜一万石
仍而移住于彼地
慶長五庚子年關原役
之後

毛利家御領國為防長
兩國之間從
輝元公於厚狹郡所賜
之一万石被減之於同
郡之内福田山井小土
生大持四个村賜七百
石
同年冬
秀元公長府御入城故

以上、「三沢家譜」(東大史料編纂所のホームページより)

※特に記名が無い場合は「ウィキペディア」の各項目より引用しました



史 備陽史探訪の会 事務局

〒720 - 0824 福山市多治米町5 - 19 - 8
TEL&FAX 084 - 953 - 6157
E-メール info@bingo-history.net
公式ホームページ
<http://bingo-history.net>